新撰
紙幣
三菱韓雄撰
明治歳丙記録
下

新選俳諧明治歳時記栞草巻之下

東京　小築庵春湖　閲
仝　香楠居幹雄　編
仝　佳峯園等栽　校
大阪　黄華庵南齢　校

發句切字之事

切字ハ發句ヲ限ラヒたる事ニハあらず歌文等平語ヨリも意ヲ切續きあるりて續り結ひよく調ヒたれハこの通せさるハ切字なれと發句ハまして句を切る変なるときハ字れ上乃句めさたる物ヨリ来て余情を含める能そ仮故ヨリ初篇も天・亦・哉・波ハ大ヨなりとのひ又切字とハ句を切るヨリて大ヨなりと言ヘり切續ハ秋とのはるヨなりとハ二十一みなれ扱ひと十七ヨの扱ひまて孫扱ヨりのこれる法あきハ人を用ひて初ヨ人きなり四ハ八〇山路来て何やらゆかしすみれ草　芭蕉

はし。○さ人数毋なまはしそ涼の約見せるを活物を附んこのあよ格をそつして合ゐをなしたるものの也何そのうをと現在のしまそ結ふ格い元来なしされとやらへやらんの様なまりたるまそ何やらんゆうしとひしなるへし次ハ此そかしきこいふへきをは久事へて此そのはしこんなしたる也次ハこそなるなまを涼ぶいふへきをとそ涼ぶ式と約めたる也欲まも勿切乃百ゑ云葉狩りたるものの多し俗て本義波の意格まをなきゐなまつてゐゑ云葉ひ知て後約ふへきゐなり○浜波面通ふゑ者の俗あゐ歌狩森見如浪意の関古見も我森見ゐるこふへきを家狩森見如といひしも也ゐこゐゐとゐもいひ出てゐもあゐされゐ涼ゑ強強勿を養て初ふの八約まゐへらんゐなりとゐなる約ものの也

○本辞圖 ○辞一変圖 ○辞二変圖

き	い	ぬ	に	たり	けり	なり	めり	ん	まし	らん	なん
	し	ぬる	ぬ	なる	ける	なる	める	ん	まし	らん	なん
しか	つる	ぬれ	ね	たれ	けれ	なれ	めれ	め	ましか	らめ	なめ
		そ			の			や		係	
		そ			こ						
										徒	
										け	

○上のはん徒ハ終と云葉を尋切て云葉まて結ふ格也又上のつまのてゐはのあるも甘らもうくはしも唐くて切の結ひ上の一形くるゐ玉知るへし

○中のそのゐ係ハ切ゐく云葉を尋て結ふ云葉まて結ふなり

○下のこそのハ係しき云葉ゆ尋めれ和の尋のそけしきく云葉まて結ふなるを

き

過去のき ○きハ既の義なり在既ハアリツキ也見既ハミツキ也関既ハキツキ也既ハテ也在既ハアリテ也見既ハミテ也関既ハキテ也

○風まもかうまの世む橘花匂ひあゐ鶯まちる ほうりき

○こうりまし人を思ひて鶯をなまの世狩ハ去もいもねうひてき

徒 ○山鳥の尾りすまき尋の花 有風 義仍

日 ○本居名てますうこをまう世てき

つ

見つ ハ意の義まて○見つハ見意○関つ関意○

関つ 見つ ハ意の義まて○見つハ見意○関つ関意○ なりひつハ思意見○なりしつハ尋意

竟○なく○なくつゝハ者有竟とゝ山ゑ長なり
○そふより山あゝなるまゝます所花の数を数さくめり
徒○いめくとゝ人ゝいそれぞとゝの者　湖風
ハ○埋ハうれぞ　接本のかのなて来　本所
モ○山住も人ゝ対見川花りみち　春蓮
ツ○秋月まりの移まつて移る書　樗良
ツゝハ競くの者てゝて一ツ法三ツ法なくゝいひて数とゝふ
言なり

ぬ　畢のぬなり○なりぬハ成徒○たゝぬハ絶徒○去りぬ
徒の義也　去ぬ徒○きぬハ来徒也徒ハ他る徒去徒
まゝあゝ法除て成畢也

毒の映るゝ茶つまむと来りめを君ゝ花を去ハまとひぬ
徒○新ら〻しき命となりぬ明の春　恒丸
日○秋風の心動きぬ縄まて生　嵐雪
モ○秋法をゝ小豆も逆ぬ行たき　芭村

に　不也○見えぬハ不見○関えぬハ不関也は去茶の元を
之をむつうゝ流せ者れハ品の言ゝて為る紀に
○義ゝ為ゝ見ゝ体めゝ通ゝとゝ現ゝ自見ゝとゝハあゝに
モ○やゝゝて死ぬけゝきゝ見ゝえぬ姫の寄　茅
ハ○去ゝゝゝゝ茶をゝ動ゝ松ゝ去の月　迷渕
徒○秋淋し憐物いゝに森もやゝらに　羽鳥

たり　而有の約也○なるハ而有ル○なれハ而有ル也
○こめたりハ籠而有○ゝゝりハ得而有○うきた
りハ浮而有の約也
○去るゝて急きゝゝらし白鳥の衣刈　なりあめはのゝ

○笛の去れを吹ゝ吹ゝ吹ゝ

○ゆめ　皆もゆめ形容を見てその既行板ふを経ふ
　すべのゝ人り教百傳の板ふ一や深る百傳まなつ
　た板ふ一やうゝ百傳まを来ゝ板ゆ一や続見西
　るといふるせ
○夜雪門宮慰まのそ見忘とハゝ形のゝ〜もの人もいふ見。
ハ　○菊ありて枝ハ去ぬあり　雪乃京　菊成
モ　○さゝゝたれの雪ゝ　雪乃上を流る見。　松之
後　○大義　水乃上を流る見。　松之
ん　ん と先と別なるゝ人あゝ比なき俗名ゝ先えんなと
　書又あ乃匂れ有ゝ去て○先をゝより云く先らさ紀
　のゝこゝあてあるゝて先ゝ人ゝ
○このゝ見山いさ云ゝりて見そりゝむゝ　経助ゝ見ハ見や助と
○見ゝゝ衣ハ指ん弱寿ゝ　ぬきその隠ゝうつろひぬとと
後　○元ゝや衣ゝ　ゝ西づゝの左刀佩見　ち来
ハ　○衣次め元助ん　ん助ん　浜ん　ゝ物の表　樗良
モ　○告も　ゝ衣ゝ　衣ゝ人ゝ　月助ゝ　外二
ま　ゝまゝ　ハむ乃ゝ　ゝ見ゝ　ゝ見ゝ　ゝ見ゝ　ゝ見ゝ　ゝ見ゝ　ゝ見ゝ　ゝ見ゝ　ゝ見ゝ
　ゝ方乃むの言ハ紙続世九後なる○たのむ○なゝむ
○とゝむ○ゝゝむ　ゝゝむなどのむ又ニ十七後なる○ちつむ○
す〜む○ゝむ○たの〜む○のむなとのむなれとゝむさ
いとゝ矣なり○見ゝ　ハ見物ゝ　ハ図物ゝ
○ゝゝ　ハ言物ゝ　ハ言物ゝ　ハ侍物ゝ　ハ侍物ゝ　ハ侍物ゝ　ハ侍物ゝ　ハ侍物ゝ　ハ侍物ゝ
　ハ思物ゝ　○なゝ　○なゝ　○なゝ　○なゝ　○なゝ　○なゝ　○なゝ　○なゝ
　言なり
○山里ゝちり物ゝ　ゝの物ゝ　物ゝ　ゝ言ゝ　ゝ言ゝ　ゝ言ゝ　ゝ言ゝ　ゝ言ゝ
　ゝ〜ゝ上下ゝ　会せゝ

○姉〜　さもあてれもいのゝこ　ゝ人ゝ　ゝ見ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ
　中ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ
○ゝ物ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ
　ゝのゝ〜ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ
○ゝの中ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ
　ゝませゝ　ゝ約ゝ　ゝ約ゝ　ゝ約ゝ　ゝ約ゝ　ゝ約ゝ　ゝ約ゝ　ゝ約ゝ
○ゝゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ
　せは　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ
　徒○冬ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ　ゝ人ゝ
　モ○振無川　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
　ハ指重後の相なり○めり○ゝより　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
　ゝ句ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ら　ゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
　ゝ何ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
○ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
○ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
○ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
　○ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
　武義玉川　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
　徒○妻の時や　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
　ハ○ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ん　なゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
　なん物成往くれなんハ物者往　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
○いてなん物出徒○のくれなん物隠徒の言なり
　孤ひのなゝ人万紙ゝなもとよめるゝ本清まて欲

マアと欲る也○の〻欲るやうなるものつ〻ゆ〻しさの
含めるなり
○まことにて八きゆるところ北海なく者のんハ系まとけなん
○白ゆ〻北ゆ〻ゆき山も交まゝ浪ゆ〻まも風ハゆ世なん
○君ゆ〻ゆ〻てあさゝゝこゝろを者もたハ末の松山浪もこゆ〻ん
モ○名まゝ知ゆ〻〻廉もゆ〻なん廉ゆ〻山　こき旅
モ○舞月もん嶋の乃海の海草もゆ〻なん　月杵

けん

けむのけ○本徳の約まる也○本徳とハ左ゆ〻の欲ゆ
○何〻ゆ〻の年〻の本徳きるあゝたゆの月そ本徳へ
行　さく
○よそゆ〻のゝきゆ〻のまゝ〻ゆ〻の世る羽川涙もとなゝまゝ見刻初けん
ハ○強金ハ世て出てけんそつ松魚　そ
ハ○を〻ゝ〻く日ハ〻ゆ〻けんゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻　鰆甲　書塩
徒○澤ゆの雪を知れけん松の月

○辞一變の部

そのゆ何むゆ〻ひ

ゝ

去の反ゝ○いふゝ〻ゆ〻ゆ〻ゆ

たる　はなりの一時まして而者の約れる結んぶたり芝居
○此風を俗に時雨よ芝居はまたれたる綱たる
何○公三句し哉　青柳　こき旅
ソ○見ぬまちよる角を蔵る緒の原

ける

けりの一時まして未まりけりを持てちるく
○冬こもり思ひものけぬ冬の雪より恋と見る恋雪の解る
ソ○夕涼こよろこそ男ふすれける　主角　羽笠
ソ○雪のりは行の石笠そまきりける　武陵
ソ○をしの意雑れ　まりとそ恋ひ
はなりの一時まして歌花の泡れる結なり

する

○ことなくは思ひほとやかのひまそぬ恋の中れ恋たる年まきする
何○やこの心の心のる落白雪月旬ひする　こき旅
何○何雪となく絶を逢一雪氏雪する　越ゆ

ゑる

はめりの一時まして○行める○ゆめる○恋ある等
○知もけんゆてもとへ恋の中一流のまて絶て流をたくある　こき旅
ヤ○わろおてくりや呼める兵の紙ふ　み二
ソ○川柳の歌をそろめる恨ありて

ん

はゆりゆるめくなれともくくまる粒の結ひして流ふ
雪雪ん花のよ○まゝ○らん○なん○けんともまある

○七夕まゝつる雪をあるて年のをもゝ雪やまゝらん
何○人の雪を何ゆたとゝむ恋の爰　李煙
ソ○ゆや流んまゝの母も妙のくゝん　葉嵐

まゝ

○雪の谷ゆりのつるあなゝ人本ゝとゝ流のたくまゝ
○見ゆ人もなきゝ山星北極花卯のちりちん流そ咲ゝるまゝ
何○月ゝ花流のこゝ恋の山　紀石
ソ○いゝろそゝ恋ゝ同まゝ　池の月　李塘

らん

○神ひちて結ひゝ水の姑ゝ恋ゝ風や結らん
ヤ○とゝの暴ゝ雪やゝゝらん　鯉紅　秀吉
ヤ○俗人ゝ今やゝゝらん　ゆ紀　こき旅

なん

○立田川ゝちゝこれて流るゝり流ゝ流ゝ俗中や絶ゝ
ヤ○雪ゝゝまゝ流ゝや越なん雪の山　巌翠
ヤ○本のゝちる風や立ゝん　村鶴　詰竹

けん

○初まゝゝゝゝ雪の八姑ゝけん若ゝきゝのゝゝゝすゝゝけん
何○雪を見て何ゝゝゝゝけん月の雪　巌翠

ヤ○本兒も人も呼けん言の用　み在

○辭二變之部

こそ　その結ひ

き　の一変　い　二変　い　の也

○言すてゝ山彦の答へ聞こえたるうゝ人たれ聞こそ思ひ出神ぶり

○きのふこそ今日の名つゝ　大根引　麦面

○憐こそ　立て立て　しの麦の秋　月杵

つ　れ　つ　の一変　つる　二変　つる也

○ちる人なき門をこそ人踏て　心そ者る新しぬ　うき

○咲て　こそ　花とも見つ　霜本者　菊成

○ゆとゝきこそ　おのゝ名を　霜里

ぬ　れ　ぬ　の一変　ぬる　二変　ぬれ

○大方の秋来るゝ　こそ　逝き帰と思ひ　ぬれ

○見まゝこそ　思ひ　ぬ　嶋の錦　菊成

○松こゝろ得こそ　知ぬ　年月西　秀寿

ね　い　の一変　ぬ　二変　ねも

○ある人とも人用ゝ　この言けん　かけ　こそ　濡ら　ぬ

○ゆゝこゝ　あとこそ　ゆ　ゆ　ゆ

め　んの二段めも

○月秋かぜつゆ吹きとおくけ二見の浦はあけてこそ見め

○第七夕て渡るこそくめ天の川　れ　生角

○猫りこそ春めり川行の波まくら　ここき縁

まーこの　まーこの二段　まーこの也

○きこれぬとをうこそいはすまーこの玉あの上つもこさりせい

○長のうをいあこそ興ふまーこの秋の雲　五　春

○淋これくいはこ庭とこそすまーこの　ここき縁

らめ　らんの二段　らめ也

○大系也をーこのゆもうこそ非代のむーー思ひのつくめ

○岩妻のあのの書こそあるのめ　重　五

○見れのこそ作もたるらめ涅槃像　完　岱

なあ　なんの二段　なめ也

○世の中はうき物ことに身をなげい沖さ者こそ泳く蛾ちめ

○第相こそをくなるなめ風深ー　ここき縁

○午時まこそひちへ行ちめ蓮の舟　清　行

けめ　けんの二段　けめ也

○きまてのうこそとこそやくめけめ源る浮ふ蓮唐こけり

○赤隈川や二二の雪こそ解まけめ　板　雲

○月鏡ここそ行まけめ有とこきに　完　岱

しは　ひあ子箱の浮き泡の結ひあれとも第る也

せる緒里結ひより山とんやそく知る汐一面

れの別る間をあけにあーまーの切続いるる

句を載るを見て知らへーー委義い俳諧句

天系赤波稲分とい赤る義を伝て見へーー

一赤こいひなーはて二段切六点ーー

と点ーーなこいつ多をいれと皆天系赤波

切続きの知るあるーまるあーされと知んの

ある筋其句の体載とあけてこ和ーー

月てらく雲ちらくとものき　志　う

昨るる系山なこおに。初杜鵑　赤　生

三段切

[illegible]

二百五。二百五。品とて一品 丘言

笑をれつ。笑ひつ。梅の咲えなり 詩一日

[illegible]

二段 元日の晴。二百の句もつゝ 丈た

[illegible]

ぬなり

ど。四一 まくてもあるきのど。蕃椒 義

や栽。 夕四や姑いるくの駆ちな 仝

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七日より八月一日の間の事なり　後雪
幸林も歳代おなじ。ルのみ相引　こき旅

哉之部

兄弟北斗と宮まゐる難波哉　こき旅
鳴る鼓の数を重ねて紙弘　万樹
霜白して月の雛ゐる柳かな　白古
ふる川なく蛍星とふもと弘　一賀
流るる人色の碧ゐる桂弘　月旅
来る船の数毎のまゐる水鶏弘　寺山
汐干なり百沸り酒の酔　蓬毎
角して知の花蓉む浮世弘　山川
なゐひゐひんのまわる扇弘　秀寿
日白潮紅のうてて北暑弘　泗浪
ひとつ出て夕蓉つくる蛍弘　思風
ふるるさえなるめ北なる田植弘　晴翠

峰へうゐよ蛍を離るる初弘　残東
ちるを忘れて獨り一扇弘　角丈
花よりも増る蛍の秋きりなし　清吉
柳ありと添くきもある蛍弘　百可
秋八月のうて結まる秋のなし　連柳
一蛍まて沸ゐうゐなる柳弘　林元
移蛍のうてまて松の白ひ弘　松堂
蛍北を四国と蓉の花火なし　寸海
ちるのを蛍さしてある葉弘　格愛
打ち重て衣のさむる木槿弘　柳童
雲の月夜あゐうゐきの月見弘　東四
よの秋まる四方天まてきき弘　雅正
けゐゐ蛍きもふ夕の蛍なし　野亜
なれ物の根まあつゐ熟柿弘　万甫
流るるせもやゐ都もある財あるなし　蓉国
蛍ふゐて時めくやうなる山蛍弘　仲芝

夕顔の丈へあれもくさ弱
のゝ姫の丈つのまこもの尾花弱
萩花り也まつも塩ゝ鳥弱
雪時の肥ゝあゝ〳〵き旭弱
四つくりと添ゝ流牡丹の女
高砂てきけの蓋ゝ水鶴の孔
眼の花ゝ色ゝ高ゝ弱
傳つと二ゝ筋三ゝ筋柳ゝの女
高ゝつくゝ枝つゝ弱
豆腐やゝ機織とはゝ弱
柿四ゝむゝまゝゝ弱
高ゝ釣ゝ弱
なゝつゝき高ゝ秋ゝ弱
とゝとゝ鮒ゝひゝ弱
年礼もつとめきゝ四ゝ柿ゝ弱
ゝひゝの赤ゝ白ゝ木の四弱

東屋
角兵
果慧
是来
素陽
花合
瀧水
多山
三夏女
三機
小四
津水
年山
攝國
寸中
旭兵

是ゝ人ゝへゝて四花の白弱
唯の木の風ゝ揚ゝ嵐の女
花咲てゝゝゝ山弱の女
法ゝ日に伸ゝ柳の手弱
四ゝ女の雪弱ゝ四弱
一ゝゝ佛ゝ女ゝ山花ゝの女
一あゝ茅ゝ名の四弱
秋の四て木の月時弱
四ゝ平の行ゝ女ゝ弱
改めてつゝゝの砂ゝ女ゝ女
初ゝゝ服つきゝてゝ松弱
月ゝ名の名ゝ蓋ゝ牡丹弱
時のきてゝゝ一弱の嵐ゝ郎
海山ゝあゝゝ山ゝ弱
船て来て二四ゝ田植ゝ女
蓋ゝ上風ゝ女ゝきゝ柳ゝ女

左右
泉溪
李塘
芝旭
英哉
月杉
興春女
吉海
沼兄
外二
安外
白果
春趣
甚通
貞山
如水

時あるべき時は桜植のよき酒　鼠雷
本隠れて鳥もなかぬ春さびし　百合
もり粉の赤くなる百合の花盛　佳友
春時雨春ふるとは沖の島　梅好
こがれて物くさきは春の雪　西石
とんやうれ竹あるは昔の昔　其好
もとより実とかりの月の雪　梅志
まつ〳〵咲くまつの月の雪　吉沖
家もてふ家もうるる紀聖多　三三雄
排稲の中よりとき憐　雄風
服りつきて踏みく祖のうし　鶴月
乳りあきこの月桜蕾とる　泄月
枝まきる藥り秋の月の　兄東
詩々れそうもひとりむる新酒　抱玉
多多程むくこのる梅の蕾の新　松蛍
取ってきの梅のとうぬ山女　一理

枯とひつとはまきつ秋の月　三甫
別こる出てこるる月の雲　英雄
霜掃て華こつるる小春の空　圭悟
止むこの月あるり時の注朱　伸樹
本る風も牡丹の酒の香　沼尤
めつり来〳〵名の知り小春　義翠
三二の神本月もとの花の　乗芝
いくつの月十あるる冬田　如意
時あり時あるる月の月雪　紫雄
梅果てつよくこの月雪の香　文英
船とる一段りつきく初霜　鶴洲
隆りしき世を夢流を野中　春雨
除夜の鐘を夢てまとまる　文友

やの部

明りやかくこの月流の紙鳶　左磐
ふる返る花木の色やまの面　市井

素風や初ろ〳〵破の巴り乃　逸古
常や明ぬかとまてんのきく　梅盃
時の素や物すまきれ四雑の琴　久雄
たのとゝぬさひや常梅の花　葉布
梅咲や片枝を他屋の杉なるゝ　板居
も咲けの人もそや古やつゝら茶　義晃
猪の戸や板を乗て　月梓
二人ともそうれぬそしや杜あ　糸湖
をを山をとれまし　湖あ
ゝ切や石をなくれの水の音　朝井
干てある海月白や夕暮り　左馬材
ゝ四五ものやさつきの海苔　史雄
人の四ぬ時を　稲実
むゝ起や行ともしく百福科　志森
秋風や一隆白さ　波　一理
一日や旅い方あゝ　起きつゝ　四板

吹変すんゝしまるや　秋の風　志弓
宗秋や扶もつ僧の姿　志石
素風や烟ゝ隆り紅　志為
原亭や蕎さゝ時の拍尾花　烏明
稲の波立や夕雲の立夜　久起
釣宗紙しゝや寒れふゝ　雪舟
蔵栗の音や月さ注秋　芭巴
改ゝ多や雷まて　景文
時雨ゝや松ゝ夕日を変なゝ　蕉旭
本枯や泥ゝ友ゝ猪の声　巻
多化や友ゝあゝ　稲砂
花ゝ樹のんとすゝや伸ゝ　和分
武義時のふしや蕎本の拍面　丘哉
蕎社戸や別法のやうゝ鯨鞆　桃壷
永きゝ日や一ツ宛きゝ　花彩面
一日や猪ゝ　花彩面
雪窠

咲ずまひてゝきえぬの花の雪や如ら花　三丸
落てゝしらぬ月もかりみや相一茶　可示
見てゝなまとまる雲や風の出　如雪
もひひらる仰ゝ　物月や草の上　東志
四月や一花ゝきはゝ物の霞　素山
ひとゝ花りゝて雪のる秋の海　東成
物雪や人ゝる霞のつきゝ雨き　雪鄰
相物や一本経まて抹香　徒水
手作の大根ゝはる雪薄　白雨
風ゝる海の雲や孫の秋　一正
詩膳や秋深き咲の雲　雪鄰
咲ゝあまる秋や落の雨ゝ　流水
松の露作の畑や雨の月　一測
降雪や禁せるてゝる物の風呂　巻菊
初とゝみうちや雪ゝ孫き　松国
まゝゝまゝ花の山雪や初時雨　松水

花の雪や巻ゝ本戸九四　巻志
極やゝ八かの鶯雪物　南路
まゝ雪ゝ雪ゝまゝ月や初物　文風
盤花ゝも越ゝ雪や本下雪　呂恭
雪物や雪花ゝ雪ぬ物の雪　金博
立ゝ植や落ゝ風の雪ゝき　唯一
竹のゝや人ゝもかき育ゝ　里言
切まて花日数ゝ雪や初物　雪山
雪ゝ山と雑ゝ一春や時雨　溜水
雪ゝ雪花ゝ雪ゝあゝ庭や梅物　南左
霞川や雪四月ゝ雪　梅白
雪部ゝ陸や雪ゝ雪ゝ物ぬ　白左
立ゝ植ゝ雪ゝ山桜の雪雪　留栽
雪花雪ゝ思ゝや風ゝ雪ゝ時　竹左
梅雪花酒ゝあゝ雪ゝ鳴の雪　雪雄
秋風や雪ゝ花雪ゝ雪ゝ山　士云

炬燵の日や釣もよく寂れ果る　秋元
夢や谷の〻雪を舶流し　松雨
苔水をうむやみそぬかり　而洗
うの山〻しまぬひきの霞かな　暉文
大日枝や嵐の下の雪れ風　李周
下茅も落ち紙やうめれむ　十湖
明障やおの〻落まとめて月沈し　花暁
山のけや雪荘一まき雪　来く
花垣れ新やゆ〻るる春初雲　庵の子
永きるや雪より下りて秘あり　湖舟
月雪や雪れ落つの数軍物　利貞
松れむ咲や姫の忘月の石　碧月
梶さくや陽とつも材ちうひ　雪城
山咲や折りるをきに咲ところ　蔵冥
ち雨や雨の月見を人の出る　素石
鈴市れもやまことる稽しうひ　一知

初雪やまつひとつ〻る旅の宿　山月
埋火やをまとる和れ風の音　乙鈎
木枯の見つく陸や松の影　思玉
松風や日毎れ友や冬の鶴　坂東
少なく〻れ〻るやあをれ雪風　壺月
笹川や落葉ふる水の音　湖月
上を上り上るや落れ下り坂　の炉
水音や月ある寸へたるの れ月　露松
はく〻なるさや日ま〻迷なの影ふき　雨吟

し

つ〻と来る風ふく〻る来る　浪見
二羽来る小荘も寂〻寿の枝　菊城
音よ白小梅より白〻極著　雪流
梅白〻さ〻れ波里の雪消て　二要
去を月音の去て〻　蹴月　好風
月のある鶴を行渉〻本下雪　十暁

なまめかしき美人のもなり　白牡丹　一垂

茅根や魚のうろこの形もなり　竹音

ど

まつのみなり　佐まつ　そらに　雲雪　それ

深風の味をあらはす　水面寺　仝

なりなり

初春の氣の美妙もなりなり　梅家

雲閉て面の風もなりなり　芦夕

相一茶の月見の姿なりなり　一山

雪の中に松の曲なりなり　其路

なり

男と女に笑ふ姿を二つ見たり　雪堂

春の月水動くを後の極りなり　玲瓏

外の花一なるべし　世なり　秋の川　梅友

旅の命清く結ひて世なり　清兄

眼の歌を捻て受なり　時雨　鯉丈

花雄

月の影ひとつ　蓮の池　水　春雪

物の影多嬉し　又さき　又蒼む　三千雄

冬枯さへ　のはりて海　後の離　西示

月の外の物もなし　唐の秋　而示

秋まさに到深の夢　水　可晴

森はてる夕の影ら　一の夢　一芽

さまざまに絵まさ　芦の影　野の雨

穂田の雲　初時雨　蓼風

一本ずつ　傾む　古蓼

筆角くに書き書ら　門の白　蓼一

あされしさうりてもよ　梅雪　松央

あされの　絵　雪　花雪

面西を玉味噌もよ　庫の夢　弗越

もれ

少しの物なるを見て蓋と蓋なり　俳友

本や雪れ雪吹こそ時あれ　宗香
雪れ乃をしへて若草求めけり　挙山
夕掃雪れて雪を空めけり　相亨

あり

晴ありまへ乃空あり鈴懸
まあふりま沼乃ふもあり紅葉　菊之
清ふるく谷や赤あり紅葉　麦盛
つゆ〳〵ふく籬もあり秋乃風　抱玉
沼を海まへ　あ乃こ雪れ　雲一
翔くれ八川掃てあり乃秋　秀亨
　　抱清

さり

去年より雪つりけり　宗薫
元山ふを雪まへてみつり秋乃月　沼志
楚今まなりて出雲より敷き掃　泳美

をや

蓋葉よ吹をやゆせの初たより　も世成

やう

吹て来る木葉雪ことれ時あやら　松乃

らん

四隅ふく立りやらん京の秋　抱清
春さ雪れ蓋やさむらんる枕　守心

こそ

ひと風今こそ乃れみとこすれ　一陽
空ふ〳〵ち絡こそ乃こそ根み枕　こき雄
月の之雪空ふこそ行き雪れ秋　雲明
あてこのきゆこそよられ冬の汁　方鈴
をしやはなるふ雪れあまはこそ　岩羊

ぬさ

来ふ〳〵さあ蓋東月　谷乃如　秀竹

又

うこふりも吹こそ初陸　半校

あきの又あついうきをなぶる　紅　玉牛

ね

耳のある鶏もあらん棒のけ　重雄
蓑もさてゆさうゆさうゆらん桃の花　其成
大とりてつつそ散らせん枯の書　嵯峨
揚禁て旅を旅はさん大こ千日　梅市
親乃きまる合ふ人咲らん秋の書　而流

そ

清の寒る時分そ張つつ師走　百木
秋を見も玄蕃のやとりそ思劉　永渓
ふさとこれもこの〜濁なる秋の書　月茶
ふまむけハ秋見書そ乃月　寿水

つ

親寄れいらのこやまけ花の雲　芭蕉
蓑を笠を祈る忘まつ也ふ流こ　里粉
秋を寒れよくきこえつ雲の蔦　こま雄

落てゆくを紅見とけつ雪の鈴　芽柳

よ

昨笠をかぶるとらーさらの花れ面　山賛
ふもめさまー第よ寒つふ花　洒兄
出頭ひとつふふ嘆よ蜜り　蔵成
蓑さめー人の袋よ粘尾花　五雀

ゐ

雲ひとる勇乃長りの柄乃花　英風
ちる時々雲もうこのけーのも　蓑月
酔るりもやの烟のくれ月　久海
協乃きをめのけて刀のこさい　子鼓
吹入て風もめるーの蔵乃中　李堂

なり

雪を明石ふなりこ高るこのけ　竹舎
形りーき雅さ雪りなり寒風　南支
黄色いの秋のいろなり楼ーッ　游江

なり

芝の戸に生なきさ白ひくきくのむ　彦雄
雁ぬるとうく思ふぬ秋之蓋上風　月麦

切字表よりなる句

涌て出る水あり水なるうら波をうつ　一理森
上総ふ〜〜ふ程雪ふり来乃雪　百良
梅ぬんとふ友こんまあふて北方　素水
茅屋ふとさそふ中ふ霞杉葉　智秋
ふ京ふ俳てそ〜〜めて来北西　菊石
長それてもおもてもおもても唯仮の庵　きき雄
本蔭ひとりとけてあるきあの月　忠
夏北雪ふ眠ふもつけねと月の雲　万嘉森
海涙ふ雲と知ふ人おふ柳　林子
海の青ふ海ふ廣ふて山眠ふ　里明
ふけそ知ふもふ北ふ歩ふも陶也　完酔
時雨きのぬとひ〜〜秋ふ〜〜　玉映
林北雪ふ辻ふ月の時雨　静麦

年乃ぬ

心ふ〜〜先人遠ふぬこふもふ人　菊之
白ふこの中北傾ぬ梅柳　素行
蕎ふ花ぬ茅根の夕月　角
生ふ人て野ふ春ふ〜〜ぬ今の月　乃原
ふふ夏ぬ茅ふ〜〜ぬ髪ふ屋　ふもあ
梅ふ卯ふ風乃ふ〜〜ぬ法ふ山　我
下知
古鏡人おふれ。梅ふ風乃外　其角
ひさの力ふ。ふの北雑賀ふ鶴雪　左京
茅屋ふ〜〜人。蛾人の後の鶴　俊柳

す

ふ形あふ〜〜れふ〜〜ふ北川　宵板
蔵ふ北ふ〜〜ふ〜〜ふ北風ふ高　独松
一変ふ山地ふも蔵ふ北和鳥　浪先

乃そのあく薄もあり　極俊
山月まんのもふまず　細代吉　野高
時しまて咲まもあくしに彩の時　加云

まゝ

求めこる仮名をかまもむめ代む　李塘
葉稀もあるうしこまを芽雄山　伊日表

しの

まこるれ者見侍まこの細の一　持重

連句之部

歌仙

年こよ花の見やうれ皆かたり　士朗
まきまこちを捨る茅芒　成美
物子毒れ的本多きを書風り　みち表
殺たやき物乃ようさまを年之　於
石山さらこ月の山毒を引出し　美

本歳のあ人きこ雪の時あるく　表
言葉さく古財宝とくるて　朗
字紙をあ花をこまこ竹　美
惜まれよ生まて本る眼をひめ　表
殺よ今年も書こ慰斗たも　朗
毒を知る石鉢れ業湯ろを北て　美
ほのあこたる重寿乃面　表
一春ハ山財多三日の月　朗
乞今年まこ月れたそれなき　美
雉やらの猫よ仰る袴着て　表
子東れをこのをふるうたそら　朗
仰こ山池ともこらに梅のる　美
たの年隠乃時まつたそら　表
のつかりと書を見年毒羅碧　朗
笠ぬひ毛をまこ寸蓋方　美
古内も古炊もやこりきふちん　表

一人械ひきひとり棹させ　朔
をゝ綱引の本の葉をかゝまよきあるめ　英
もれて紅西はの色きき葉長袋　表
月まゝ見るもはゝ〳〵汐豚い冷え　朔
新〳〵家まゝ人とまつらん　英
ほゝてゝこゝ格の調合を押えて　表
義をもり本る月を見るれ　朔
紫貝まひてゝうたふく萩の夢　英
雲の切〳〵も淋し　さく秋　表
うるゝる紀難妖作る影の面　朔
をゝなゝゝ人行まゝ　英
帯ふりは秋者〳〵ゝ行ゝ先　月
少ゝゝ格乃縄はゝ　表
咲花まゝ風もりてゝ角田川　月
丁乃河るゝの〳〵ふ雲もなし　峯

花の咲ける毒の本を植てゝ毒の林をゝ〳〵ら〳〵毒ちれ
又ほりオツとい少釣毒蛇の毒を見るゝ毒をふゝりゝと
つゝむゝ毒のゝゝ俳毒まゝ毒ゝれハ俳ゝゝゝゝゝ毒
ゝゝを思ゝゝゝあゝゝゝゝの毒て出せる句
面ゝゝふゝゝゝゝゝゝゝを花の毒　みち表
眼をゝゝりなゝの〳〵巌ゝゝゝる　士朔
ゝゝもゝも雲夜物る思を行て　表
おゝ〳〵の山ゝ山ゝ山ゝ　朔
老ゝも花名ゝる月見ゝる　表
子鈴を面ゝ春ゝゝ　朔
霧まて花命捨ひ〳〵海角ゝ　表
糸ゝゝ川乃ゝ花せゝ〳〵き　朔
長ゝ花鶴の焦る日ゝゝれゝ　表
ゝ〳〵ゝを行る嵐ゝゝ　朔
ゝゝのゝを行ゝゝゝ　表
路の春雨ゝ　朔
月ゝ花ゝゝも月ゝ出ゝゝ　表
ゝゝ〳〵ゝ見ゝゝゝ池水　朔

きくさきさき物はなくさくれるかの山の夫　表
世の中は連歌あらひしらずとり　朔
茅根を結ぶたうりは拾ふ歌て　表
見てのみる方はそやきさられ事　朔
春風は何の句ひのあるやらむ　表
所のなごさ近うまと掃出し　朔
片せくれたまて春くれ落月歌　日
露も実はの秋のなりきり　表
猶明暗の藤原ほくくと　朔
荷うて歌る名和の瓶　表
面とせをちきり捨くる夜ひとり　朔
神の知るとも雪のまことあ　表
ふれ降る時雨は重はかきて　朔
芦を結ふは萩ののふしの　表
引汐は文暮る時もあるものと　朔
無間山は雲そくやーき　表

堀橋もそろくもるあけよ　朔
建仁の二人自利して歌る　表
何事も歌は依家の面白い　朔
ほりうねの水野火とあはれ事　表
峰の雪花はことそ細やーのと　朔
三月ひとはたらて雪ぬる　表

歌仙

いとまなきさはのり長閑る花　雪笠
うらやまーきいまは萬雪　逸測
嶺の拾雨を雪のたてことあて　笠
紺屋は きぬくそれのふ　測
月とくは芦はむ種とこそつて　笠
子ともの尻を回る情　測
一家のひとつは底乃秋はれ　笠
大黒柱を拾仏まもる　測
篠張の弓をそくくやーき　笠

市地のすめを元れ意中　測
胸をとるほと鶏冠の華を風　笠
聽梳の動きれ山のけの佳色　測
ひと連き八小雪海の月の秋　笠
横笛のけハ艶ひやりく　測
育れ百の長日を棺うつきこの什　笠
世の分れなる為州の色　測
梅れちる情を雄れをつ以て　笠
夢ゆのとえちく高れ眠さき　測
らの夜をとをてをひ〜の無終人　は
言ますめれ蔦を拒ぬ〜て　梅玄
三書根八秀の風清る家もあり　測
白月をきあ〜墓の森　玄
月蕗をれと屑れ矣〜き　測
春意〜きとなてる徳角　玄
ほたく〜を結ひてとけ以ら移戸　測

難無ものなれの針ををる者　玄
金ひろうて梳をを〜帰る春り　測
ちらくと笠を巷こむ月白〜　玄
月たり果〜この新も見西〜　測
栗柿の長玉まつをも世なをき　玄
風まけれちる奪れ旅さ〜　玄
梅をふやをくを身を傳らる　仝
山吹り花〜仮のの〜れ新　測
旅人の森やうもうえる花さる　玄
礼羽蓬れちらくとすむ　測

歌仙

庵れ夏茅本まる世を淡き　西玄
日を月のけまのはる春水　行者
芝居〜氣を湯を湯者ゆく　馬
眠らる程寄れ世ちつき　者

[illegible] 馬
[illegible] 富
[illegible] 馬
[illegible] 富
[illegible] 馬
[illegible] 富

出るもとりもの人のまことの事を　又く
百風さそうて夏ふ能の者　こき雄
通し爲れお待きまるの夕べ者の　又
をそ多外多以言　雄
矣もるを能ひらるを爲ふ事　又
半ものる奥北ひり　雄
もらつ以て人を能ひ月北面　又
ふまれ如方一意百梯やる　雄
陳ふもる移尼ら神の秋北風　又
笑ひ涓り仏ものを　雄
きぬく北毋をまを潜まれ　又
泰の百より尺面ら白雲　雄
これ能響る移ましあれ　又
難於つるる金北中月　雄
能生るまて北神爰ら神ひて　又

行ひいそ法ま新市りあふ　雄
禊ら毋北咲ものの月まひき　又
巷まり文を入る情　雄
出らまて待ま北皆食遠　又
夜尺先ら〳〵逸系もる　雄
中くま今て突まぬ恵仏　又
雷ま交まて自少成の者　雄
なまま人乃言津の山をつき　又
居くまてまりらる言　仝
いつより老るを世我北玉造　雄
香垂殿ま秋をう成　又
炒うて面のまり世あてやる　雄
忘まうこのみの約を出北　又
打もまく結ら北法婦為修て　雄
宮乃罪をやつと逝る　又
禁捧る薪ハ巷〳〵雷北松　雄

切てもあまりと待もなさぬ　又
寸も世ぬ仕方哥を又さなり　雄
夏さ元　をあけ　る　吸　売　又
むく雲北清えて立秋なる月の　雄
うしのりとそれ小庵の春を待　又
防食北待よ本のみ北蕊湧り　雄
を眼よ見てもを蕊さ水湧　又
耳底よ以ま て絵る地震北書　雄
一人才北行方ま　ま　ぬ　又
物ま　ら　ふ　ぬ　な　う　り　女　拙　雄
いく付ても消四月約燈　又
鬼柳まあ　く　と　北竹の月　雄
哥　た　ま　八　美　ふ　蕊　又
多　ま　る　ま　北　ま　き　ふ　ま　北　雄
雄お峠を一息り越た　又
陰　て　ち　ま　と　ら　陰　ぬ　東　風　雲　里　雄

半歌仙

雲清の果　き　北　ま　ら　又
咲花　ま　ま　ま　祝　ふ　今　り　な　れ　や　雄
下戸　ま　も　む　ま　ま　や　く　北　蛍　又

半歌仙

水辺　ま　を　ひ　く　く　ま　雲　乃　月　美　山
風あ　く　う　ま　蕊　ま　や　く　矣　烏津
一見　ま　万　乗　者　乃　仮　ま　み　て　石
と　う　や　ら　ま　ま　と　あ　う　ぬ　者　残　芝　石
行度北む　ま　く　北　蕊　る　ま　り　津
巣　ま　ら　や　く　と　長　位　乃　思　ま　山
乗　ま　て　見　屋　り　な　る　北　ま　ま　石
祝　波　乃　ふ　測　な　ん　ル　せ　ら　く　石
教　母　子　北　ま　無　い　人　ぬ　て　ま　神　山
背中捨　ま　ル　つ　ま　ふ　物　蛇　津
ま　和　う　く　持　て　来　て　ま　る　想　ひ　石
緑　和　乃　雄　の　ま　る　ま　ん　く　く　石

仮伏の夏も月まち顔付亭　津
春ぬぎ捨る紀の国の冷山
樫陰て紙布の産の合点　石
烏賊まとれさ桶の水手　石
護摩堂に勅姫のきさ紅の花　山
まゝ母丸丁ものもの春は中　津

半歌仙

あま程よ鉾を打ても梅の花　抱仮
東風は墨黒とまる海会　相堂
塩れのるこゝゝ茶漬より乃　月底
春宣ゝて西の大工原辺　仮
月ゐて樽そゝ意もひやゝと　堂
て寄よ隙の仏寺鐘紅　底
院ゝふもも妙な紐縄乃暑く　仮
春風のうち人形の如き雑　堂
まゝとの八て恵の紐の川東　石

とんゝ附句する時作る稿　仮
蓋に茶の湯三昧所は吟のゝり　堂
の月の照て塩乃こゝふゝき　底
はゝ左舷もるひもの搭き朋に秋　仮
鍵の秋荷と蔵ゝ堂ら　堂
春て起て住ひのはる寄時面　底
ゝけて鞠の寄の切張　仮
蓋ゝ月う見程咲ゝ月なき　堂
響ゝ仮ゝとあひ月の四季　底

半歌仙

川口や面側まなる約ゝ子　面底
年刻とゝ月のも永ゝ春に皆　鳥津
より付に隠ゝ複と三鉢て　黄山
鳥ゝとゝ月まゝて水捨ゝ　底
青月に彩も月ゝる西あゝり　津
あゝてゝとひとゝりの鉢挽　山

蛇深の流まさこそむ音羽　后
簾笛のはりまつの糸繰　津
こゝ中北山をくれ扱をき　山
十九の花北もてる大手　后
七夕の履こそ袋北吟つゝ油屋　津
燈とひとりつる育赤野原　山
赤んまゆもなゝ明信よちる松　后
二書たゝこのつゝも春斜　津
小俤ゝ裸て結て月とこゝる　山
ちれ取り前の附なゝ　后
源風もなきて接ゝ如盤　津
よゝも根拳北つゝ鶴　山

半歌仙

時日今日初いて細北一筆武　由芸
月ゝ流やむ垣のあゝ屋　白起
酒抱味留ゝ和も接せ付て　丁知

紫の中へいまるゝ如　芸
夏四ゝ芙蓉なゝ船物合　起
吟より赤ゝ鶏八ゝ北ゝ　后
土ゝゝふ赤れと海北天事下　芸
ゝゝゝなひゝ手ゝ行ら北　起
陽ゝ赤打ふ髪も結合て　后
乳鉢ゝも連い赤北子　芸
源柿ゝ手つの北ゝ鶏ゝ　起
見ゝ知ゝ打ゝ北ゝ　后
天渓ゝ月の陸源のゝ引ゝし　芸
夏居ゝやゝ月ゝ北の屋　起
新酒北詰も四ゝ結ゝ　后
釜ゝめゝ赤めゝ時作北ゝあふ　芸
梅の百も紙ゝゝ北ゝ　起
捨ゝゝ頭ゝゝゝゝゝ　后

半歌仙

竹藪てよく咲たみんなの人より　肩山
梅樹園のうそめれ垣　悠〻
烏織ひとつ言白用言誕て　山
ざんぶり水まつける鶴そけ　悠
言丸よ鶴分れ沿る出る月　山
ものうちと冷る橋手の町　悠
世義ものもちきれてそれ姫海の　山
何のなるやら業売平　悠
三千を捨てもこそそらぬ新　山
あこのい義を国の見信〜　悠
凡よけよ戸をそそけ傾曲変　山
やうて樽本も流を鄭引　悠
門松のそれ出れ月まて　山
餅と拾よ物まて出く　悠
蕪つる梅象の君さまこ海里　山
砂濤〜　きぬそつ年まの　悠

花およ月の世れまむ石笠り　山
潜逗の寄る寄れ蔚付　悠

半歌仙

山の社寄も行となきの月り　蒼机
とふふり行くくきなく　抱俳
地を社つの石と塀のけて　寿巷
蛤海ねさせる蕗社みくき　机
つきひの思ひの印る弱く　俳
業社うく社ふうふる　巷
多お寄社義を雄さぬ砂鳳　机
塊間角小野ちり出奴　俳
浪ひも八ま社る俳を貢あけ　巷
漆ふま社大房ま行る　机
揮海へ間うくちる料理房　俳
行ろくと毛をそ石社鶴丸　巷
の物巷社あてるも行の月　机

[illegible]

半歌仙

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] 山
[illegible] 然
[illegible] 面
[illegible] 山
[illegible] 然
[illegible] 面
[illegible] 山
[illegible] 然

半歌仙

[illegible] 蒼机
[illegible] 杉什
[illegible] 机
[illegible] 什

[illegible] 机
[illegible] 什
[illegible] 机
[illegible] 什
[illegible] 机
[illegible] 什

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] 本
先胸髪[illegible]ら[illegible] 宣
[illegible]四[illegible] 橋
[illegible]の中[illegible] 本
旅[illegible]約日[illegible]き 橋
放下頭巾[illegible]腐あと 宣
[illegible]揚やく[illegible]なる 本
[illegible]投出[illegible] 橋
[illegible]海の色 宣
[illegible]筆[illegible]所 本
風[illegible]の[illegible]紙を[illegible]巻 橋
料理[illegible]も[illegible]金[illegible] 宣
獨[illegible]下[illegible]き流[illegible]傷 本
[illegible]はる[illegible]月の解 橋
[illegible]ら[illegible] 宣
[illegible]の[illegible]中 本

[illegible]の[illegible]も一つの[illegible] 橋
[illegible]と[illegible]のなまね 宣
[illegible]の[illegible]の[illegible]紙き 本
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ん 橋
[illegible]ふ[illegible]ん 宣
[illegible]て[illegible]ら[illegible]紀 本

歌仙

[illegible]の[illegible]の[illegible]大根 黄山
[illegible]山[illegible] 石
[illegible]て[illegible]て 沙鷗
[illegible]て[illegible]の[illegible]山 本
[illegible]海の 石
[illegible]て[illegible] 鷗
[illegible]の[illegible]本[illegible] 山
[illegible]て[illegible]て[illegible]の[illegible]て 石
美[illegible]髪[illegible]ら[illegible]ら[illegible]帯の面 鷗

作人をとみよ五山秋林　山
立てゐる野辺に花の見えぬ時　石
冊をとく程つまる恋ハ　路
南風に花の見くとと花の月　山
如所筋を堪きくと　石
水十九の恋を旅ふまれ来　路
回者実のたなくく　山
筑波をて越まるあい海秋　石
鈴をる程を汗を出るる　路
去年より十日もまの二重来　山
住吉をのりて長を出る梁　石
あちらうこちらうと見て取薩摩風　路
百ますあ山筆北をの祝名　山
祝まてをふ祝理を弟弥勒に　石
片見をきふ片見てとふ　路
祝の河豚を陽とちつ鯨　山

ふつと止てをまた又あくれ路　石
杖つ者ハ何のとおき小頭之　路
よくハ似を新もあまハあるの　山
油煙を松茸を稲を書北角　石
長くきけハ特を聖面場　路
坂の下る紙結ても居れ出　山
時の鳥り北鉄格と門　石
五ッ方の星北百とくく言の中　路
大洲茶北智を読つみて垂　山
ちらくと花も咲る落水　石
陽北茶の方とうとぬ梅の茅　路

百韻

正面をとねとまとと沢日彩武　沙路
巣北出をのりを奥こせる雪　面石
降なめ〜茶出北百を風吹て　路
どくと鉈の奴を打をそく　石

庭おきまるゆうすゝ北なり御里　路
新月のこゝろよめちやの内　信
柿賞を芝つまつてゝ焼きれる　路
流まてゝ行北菓うけうん　信
六人ちゝあ人を北あくやくの　路
腐をきれい又菅う蓋　信
夢鉢うつてやりうゝ兵北鉢　路
相れ奴病ちゝ春ちなをゝ奴　信
さつはりと田野面村ゝ義もな　路
参ちゝ五人ありゝの如う路　信
勢日うよゝてもゝ川日和　路
古地印ふむのゝ雪う極糸　信
ゝ作法う熟北ゝ見屋うし　路
頭う路をあふくあのゝ　信
隠物ち深ちりきりゝ用物さし　路
畢湯鹽ゝ歩あゝゝ和と　信

猶ゝ生ゝのゝ不粧ゝゝ行如毛　路
人ゝ法ちちうゝ村うあくまる　信
義のゝ見淋ゝちゝ海　ゝ
見鑑ゝきゝ行ゝあ野ゝう清く　路
鉢せゝう食ゝ行りゝてゝ生ゝ　信
ゝ鉄地の塔あゝ行なる　路
凌雪北夏ゝ見ゝてゝゝ丸な　信
ゝちゝもゝの注三清ゝ雲　路
塩深ゝ行つゝくゝと物ゝちる　信
大抵ゝナゝ生は底除ケ　路
提灯北蛸ひゝちゝ行とひき　信
ゝのゝ日数ゝむゝ沙緑ゆ　路
別法ゝゝ六ゝゝさゝ見ゝる　信
ゝゝと接ゝゝちゝ行ゝ　路
邪結ゝきゝう用見北刎ゝき　信
雪吹ゝけゝ生ゝ北樽中　路

樹もやせむ四もそれく務の雅　石
そのみちもちの風吹みてやる　路
はそ付れのものを大方暮家　石
むもそ多もれ人馬も暮さう　路
ゆらもて信へつめる緯あふぐ　石
百年〜まふる根雪乙重　路
ちんまりと移の積る月の玉む　石
月紙かつくそ雪る芸櫂あ　路
詩まもなほ手紙のやそく　石
豊百とふとふと毎る伽麦　路
手村らひまれあて礼榧拂　石
うろ文堀の竹る死さる　路
却後むるむさ〜ささ紙や門　石
三長斗紙拵結ま　路
みのくと照て長る竹さうさ　仝
ここも加〜こも夢結ま　石

百歳

月初をひつて鍋のさ〜さ印　路
矢ぶれ細と縫ま小使　石
近ちれもるの紙つて薬り初り　路
浴ひ〜られてそふりてひる　石
情まうそれ懺悔のふと合せ　路
そろりと拭ぶれ雑取てきる　石
倩雪まのうこ二るとふ足〜　路
井ふく紙海のちまんとなる　石
のまて文手鶴の絵ぶそ知て　路
回ん株の初〜の口ふり　石
面〜る男和さけて富の月　路
机と洗ふ河屋ぶあ雪き　石
情紙の鶏水なめて三てり　路
上紙限てきそ〜りそ元　石
梱ひとつろりわつる別蕗　路
数雪紙きる初七物の四　石

[illegible] 路
[illegible] 后
十日行[illegible] 路
[illegible] 后
[illegible] 路
[illegible] 后
[illegible] 路
[illegible] 后

葉大たく悩り北低し　杉の雨　晃　三

鯨　鯨　繼レ　墻ヲ　傳　鈴　楚

ぬるゝ北陸つゝ　五　鈴　そ　き　ゝて　三

金のへゝる華北　敷　ゝの　雄

醉フレ月ニ下　戸　客　三

勝ツレ露ニ金　能ノ　仙　雄

つゝゝと木のゝ蘚ゝゝ　山の　雄　三

枕一布ゝ　ち　紅　弁　雄

早ク起ル　左　呂　舎　三

長ク結ツ　吟　門ノ　紅　雄

蛙ゝ北　柳ゝ　ゝは　ゝも　物　思ひ　三

金歸ゝ　ゝゝ　吟　北　張　帯　雄

青ゝゝ　月北　ゝの　ゝ　桂　皮　舞　三

秋　風　疾　如レ　年　雄

簫ゝ北　純　ゝ　ゝと　面　白　久　三

素　壹　採レテ　亳ヲ　遄スベカリ　雄

貞　宝　賞スレ　花ヲ　悃シ　三

霞ハ深ク　水ハ　渥く　雄

なほ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　三

探レテ　嚢ヲ　絶ニ　得レ　殘ヲ　雄

有ゝゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　三

樓　閣　変シニ　素　因ニ　三

烈　婦　化スニ　山　石ニ　雄

ゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　三

雪　樓テ　陳　立　家　族ナリ　雄

物のゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　三

物　賣　ハ　月　ゝ　も　房　扇　ゝて　雄

團　扇　来タレ　知レ　指スレ　三

白　笠　應シニ　示レ　冷ヲ　雄

家　五　扮　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　三

閉ナウ　説　雄　俳　坂　雄

嘗見酒白川　三

十年此差帰りあふ友さき人　雄

さらに春風の友絃の交絃　三

咲もちかぬらぬ花ちりの知らぬき　雄

陽炎　外に暁天　三

和漢一折

あはれ世を捨てこもる柳　幹雄

遠雲吐れ玉の衫　友思

春山　含れ笑ふ淡し　雄

春雨の外の夜と雲の雄き家　思

山月ひとりたてきの人を募へり　雄

碎　砕に　冷・塵に　思

格別の働き語る男ともし　雄

捉行さけてちに家合　思

蒼悃は　壮年の過　雄

俤物　老寿の真　思

妾命　為レ若　擲　雄

八畠浦に　至る　思

流レ弓ヲ　暗　川の月　雄

秋風窓に寒く琴の音　思

冬に籍家寒さうの物ひて　雄

菜けの白ふ美味の門　思

忠切　奏ニ花　樹ニ　雄

謀首　伏ス　勢ニ　春ニ　思

和漢

水色や墻に鶴の鶴るる白に落つ　志つる

霜　流テ　竹　高　圓　幹雄

筆持てふ筆もも筆を面つ　う

はのうつろけ吟ちまる　雄

月ハ　分ッ仲　秋の夜　う

霧ハ　混ス　野　暮の烟　雄

ウつまてる事ふ此笠の俤さて　う

若九衣と郡とあそれむ　旅
宝ハ隔ッ故郷ノ地ノ　の
心ハ遊フ名里ノ天　旅
風景沸と者こせよ翁の跡を　う
田ノ頭ヲ関ニ杜鵑ヲ　旅
あ命のまずく老るこの人　う
悟ル秋ヲ田家ノ他　旅
愛スル菊ヲ朝門ノ士　う
十七八は花の春そ盛る　旅
拒神のすかわる廃る春風　う
伴フ蛙ヲ大井川　旅
打テ指ヲ算ヘ月日ヲ仝　う
荒テ蛍ヲ歌フ延年ヲ　う
言的と以そ月せ一せ女の松　旅
さつたり〜たる夕立庵　う
名をまりたづくる魚春雨の成　旅

国籍閃　連り　う
人柄も都を別なる紀行　旅
嚮レ情ヲ橋下ノ紅　う
償フ力ヲ路上ノ軌　旅
雨晴テ律ヲ解ナリ　う
昔ハ此ハ人の古の月　旅
美神の庵の春の名月　う
紙のう旅〜世変ひそと　旅
峯ハ曝レ風ニ高ク高　う
道ハ従テ時ニ顕ル矣　旅
寄鶏の出来〜京の和殿　う
暮雲花ハ吹く　旅
なを言きとる弱名は一夢　う
○和漢の和句の韻を綴す漢和和句も
韻と云あり平仄ハ和漢漢和共まこと義
せいつまても作例まこ仮おあるべくこと和

漢濱和の例に倣ひ新集と云書と百餘数を
あつめ俳人の仕方を考へ花鳥月雪を
言葉法印等に請求して其目録を
新恵く見えて万年後芭蕉と言事此和
漢濱あり一集中連句の称まるべし
又芥舟集中に大物浦の和漢一折夢
松柔集中漢和あり併て知るべし

新選俳諧 明治歳時記栞草巻之下 終

清金の繁き我今の世に
形衰して輝く時めきたんの
遂に亡ぶるを寄年
明治中の御世にも亦
力を尽くすに及ぶて
世林欠瑛堂を撰ぶ我
嗚呼此浪花の地に稀

移て世を慶くに栄えを
こゝに於て水ぬも今り我
寄を色を仏のさゝふふ時
しあ移さ寄り計理
明治三十五の初年
寒の生春蔦鶯のうぐる 叙

明治十四年十月十八日版權免許
同　十五年三月　刻成

著者　東京府平民　三森幹雄
日本橋区蛎殼町二丁目四番地

出版人　東京府平民　須原鐵二
日本橋区西河岸町十二番地

發兌　東京　稲田佐兵衛
〃　山中市兵衛
〃　小林喜右エ門
〃　高木和助
書林　〃　旭昇堂
大坂　前川善兵衛